

「キリストの弟子として生きる」

ヘブライ人への手紙 13 章 7～8 節

「あなたがたに神の言葉を語った指導者たちのことを、思い出さない。彼らの生涯の終わりをしっかり見て、その信仰を見倣いなさい。イエス・キリストは、きのうも今日も、また永遠に変わることはない方です」。

聖学院みどり幼稚園園長・チャプレン、聖学院教会牧師 赤田 直樹

皆さんようこそ、全学礼拝にいらっしやいました。秋のキリスト教週間のテーマは「聖学院 120 周年を覚えて」です。さらには、今日 10 月 31 日は「聖学院大学」の「創立記念日」で、今年「35 周年」を迎えています。はっきり言います、皆さんが今、ここにいること、それはまさに「奇跡」です。今日、僕は、そんな素晴らしい「奇跡」のお話を、皆さんに伝えようと思います。

今からちょうど 30 年前、僕は聖学院大学の 1 年生でした。その時このチャペルは、影も形もありませんでした。入学式、卒業式は体育館、全学礼拝は 4 号館の大教室で行われていました。ちなみに、僕が入る前は、全学礼拝は、1 号館の今はなき 4 階大教室で行われていたそうです。

先日行われたオルガン奉獻式で、菊地先生がお話されていましたが、チャペル建築の委員会ができたのが今からちょうど 30 年前の 1993 年、その委員会ではパイプオルガン建築も視野にいれていたので、30 年経った今、ようやくこのチャペルは本当の意味で完成した、といえるのです。30 年前に、この場所に影も形もないのに、「チャペルとオルガンのための委員会を作ろう」と言ってくれる人がいなければ、私たちは、今この場にはいません。

それだけじゃありません。「委員会を作ろう」と言ってくれた人がいたのは、女子聖学院短期大学の時代から、献金が続けられていたからです。まだ献金が 1 円も集まっていないのに「この場所にチャペルを作ろう」、そう呼びかけた人がいて、応えてくれた人たちがいたから、私たちは、今この場にいるのです。

もっと言いましょ。みなさんが今、聖学院大学の学生でいられるのは、ここに大学があるからです。「そんなの当たり前だよ」と思うかも知れません。でも、当たり前ではありません。大学ができる前は、短大だけだったのです。短大だけで、大学は影も形もないのに、「ここに大学を作ろう」と言ってくれた人がいたのです。当時理事長だった大木英夫先生です。大木先生が「ここに大学を作ろう」と言ってくれなければ、私たちは、今この場にはいません。

そんなふうにして、今、私たちがいることのルーツを、遡ってゆくと、今から 120 年前の聖学院神学校の設立に遡ります。今から 120 年前の 1903 年 2 月、ハーヴェイ・ガイ博士が、東京大学の正門の斜め向かいにあった本郷基督(きりすと)教会を再建して、その一室で神学校を始めたのが始まりです。その年の 10 月には場所を駒込に移して、10 月 6 日に聖学院神学校の開校式をしています。

「聖学院」の名前の由来は「聖なる学院」ではありません。「聖学の院」です。「聖学」とは「聖人の学」です。「聖人の学」とは、「聖人の教えを学ぶばかりでなく、学んで聖人となる」学びです。だから聖学院の理想は「聖人を養成すること」であって、「聖学は生涯続く」のです。

私たちが、今ここにいるのは、「生涯続く」「聖学」を学ぶために、そして、一生を通して「聖人となる」ために、ここにいます。まさに「奇跡」ですよ。

まだまだあります。「聖学院」は 120 年前に突然生まれた訳ではありません。かつて、本郷基督教会の一室で始まった神学校は、最初「ドレーク・バイブル・カレッジ(Drake Bible College)」と呼ばれていました。ドレーク将軍が、神学校の設立のために、ものすごい献金をしてくださったからです。アメリカの人々が、献金をしてくれたのは、日本のディサイプルス派の教会に、ディサイプルス派の牧師を養成する神学校で学んだ牧師を送り出すためです。

当時、秋田の各地や本荘、山形の鶴岡、東京の各地、福島、仙台、山形の新庄、そして大阪と、ディサイプルス派の教会が生み出されていました。でも、ディサイプルス派の神学校がなかったので、日本でディサイプルス派の牧師を育てることができなかったのです。だから、日本にディサイプルス派の牧師を生み出す神学校を作って、日本のディサイプルス派の教会に牧師を送り出すという、ガイ博士の考えに賛同した人たちが、たくさんの献金を献げてくださって、聖学院ができたのです。はっきり言えます！ 当時、日本の各地にディサイプルス派の教会がなければ、学校としての「聖学院」は生み出されていないのです。

では、どうして日本にディサイプルス派の教会があったのか。それは、聖学院が生み出される 20 年前、今から 140 年前の 1883 年、ディサイプルス派の 4 人の宣教師たちが、日本に派遣されて来たからです。最初の宣教師の一人、スミスの妻ジョセフィンは、秋田に行って 1 年経たないうちに、天に召されてゆきました。最初のもう一人の宣教師、チャールズ・ガルストは、秋田で 4 年伝道した後、鶴岡に移ります。そこで、ディサイプルス派の本部を東京に移した方がいいということを、アメリカのミッションに伝えます。それが聞き入れられて、本部が東京に移り、後に神学校が生まれることになる本郷基督教会も、そのタイミングで作られてゆくこととなります。

最初の宣教師たちが日本にやって来てから 10 年後の 1893 年、ガイ博士が日本にやって来ることとなります。ガルストと、ガイとの接点ですが、1897 年に開かれた第 1 回目の「年会」に二人とも出

席していますし、その次の年の 1898 年には、ガルストとガイと二人で、東北地方、茨城への伝道旅行に出かけています。その旅の中で、ガルストは肋膜炎を患い、その年の 12 月、天に召されて行きました。ガルストが「日本に行く」「教会を作る」と言ってくれなければ、ガイが「その教会に送り出す牧師を育てる学校を作る」と言ってくれなければ、私たちは、今この場にはいません。

まだまだあります。今から 140 年前、宣教師たちを送り出したのは、私たちはディサイプルス派と呼んでいますが、正式にはクリスチャン・チャーチ(ディサイプルス・オブ・クライスト)の運動でした。この運動は、19 世紀の初め、アメリカでキリスト教の色々な教派が一致できないでいる中で、「聖書の教えに帰ろう」「『あなたこそ生ける神の子キリストです』というペトロの信仰告白のみで一致しよう」と考えて生まれた運動です。バートン・ストーン「クリスチャン・チャーチ」と、キャンベル親子の「ディサイプルス・オブ・クライスト」の二つのグループが合同して、今から 190 年ほど前の 1831 年 12 月 31 日にできたものです。ストーンとキャンベル親子が、手を取り合っていなければ、日本に宣教師を送り出すこともなかったでしょうから、私たちは、今この場にはいません。

まだまだ遡ります。ストーン・キャンベル運動が生まれたのは、長老派と呼ばれる教派への反動としてでした。だから、長老派がなければ、もっと言うと、16 世紀に、ジャン・カルヴァンがスイスで宗教改革を指導し『キリスト教綱要』という本を書かなければ、私たちは、今この場にはいないのです。

もっと遡ると、カルヴァンが活躍できたのは、マルティン・ルターがドイツで『95 ヶ条の提題』を公にして、宗教改革を指導したからです。今日 10 月 31 日は、その宗教改革記念日です。ルターが『95 ヶ条』を公にしなければ、私たちは、今この場にはいません。

もっと遡ると、プロテスタントの諸教会の母体となったのはカトリック、カトリックはキリストの弟子たちの働きに繋がっていますし、キリストの弟子たちの働きは、イエスさまが御言葉を宣べ伝え、十字架にお架かりになり、復活されたことにつながっています。イエスさまがいなければ、私たちは、今この場にはいないのです。

このように、イエスさまの御言葉と十字架と復活がなければ、私たちは、今ここにはいません。そして、キリストの弟子として生きた人たちが、その御言葉を伝え、その言葉のバトンを受け取ったキリストの弟子たちが、さらに言葉を紡いで行き、聖学院を生み出そう、チャペルを作ってオルガンを入れようと語ったからです。だから、今、私たちはここにいるのです。

お金があったらチャペルができたのではないのです。どんなにお金があったとしても、「チャペルを作ってオルガンを入れよう」という言葉がなければ、お金は動かないし、集まりません。「言葉」なんです。「言葉」があるからこそ、お金「も」計画「も」動くのです。

誰が言ったかは分からないのですが、こんな言葉があります。「体は、食べたもので作られる。心は、聞いた言葉で作られる。未来は、話した言葉で作られる」。

「体は、食べたもので作られる」。これはよく分かりますよね。体に悪いものばかり食べていれば、体調を崩します。

「心は、聞いた言葉で作られる」。これも、何となく分かると思います。身近な人から否定的な言葉を浴びせられ続けた人、周りから NO を突きつけられ続けて来た人は、自己肯定感が低くなりがちです。「どうせ自分なんて…」って心が作られます。逆に、周りから肯定的な言葉、あなたは OK と言ってもらった人は、自己肯定感が高くなる傾向があります。「自分にはできる！」って心が作られます。

「未来は、話した言葉で作られる」。これ、分かるでしょうか。「どうせ自分なんて…」という言葉、自分で自分に浴びせ続けたら、「どうせ自分なんて…」って言う未来がやって来ます。確かに、「心は、聞いた言葉で作られる」んですけど、私たちの脳は、自分に近い人の言葉をよく聞くようにできています。そして、一番自分に影響力を与える言葉を語っているのは、先生でもない、友達でもない、自分に一番近い人＝自分自身なのです。

だから、あなたは、「どうせ自分なんて…」って言葉を、二度と自分に言い聞かせちゃダメです。本当は、自分よりも自分に近い神さまが、言っていてくださるんです。「わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している」(新改訳イザヤ 43:4)と。あなたは、イエス・キリストがあなたのために命を捨ててくださるほど、愛されている存在なのです。

「だから自分は大丈夫」「I'm OK」「天の父なる神さまが私に託してくれている使命を、私は果たすことができる」。そんなふうに、自分で自分に言い聞かせることができ、その言葉を周りに伝えてゆく時に、「未来は、話した言葉で作られ」てゆくのです。

私たちの今の世界があるのは、そんな言葉を話してくれた人たちがいたからです。御言葉を語ってくれたイエスさま、主の御言葉を伝えたキリストの弟子たち、「聖書に帰ろう」と言った宗教改革者たち、「さらに聖書に帰ろう」と言ったストーンやキャンベルたち、「日本人に神さまイエスさまの愛を伝えよう」と言ったスミスやガルストを始めとした宣教師たち、「神学校を生み出そう」と言ってくれたガイ博士、聖学院の諸学校を生み出そうと言ってくれた先達たち、チャペルやオルガンを作ろうと言ってくれた先達たち。

そうです。私たちの今は、その先達たちにとっては、まさに「未来」だったのです。先達たちが、命の時間を使って、時には命を賭けて、「未来」を語ってくれたから、先達たちにとっての「未来」を、私たちは「今ここで」過ごすことができているのです。

ガルストは、亡くなる直前に、遺言はないかと聞かれて、「マイ・ライフ・イズ・マイ・メッセージ」と答えました。「私の人生が、私の遺言＝メッセージだ」。人生を賭けた言葉を語った、だから、今がある。

今度は、私たちの番です。私たちも語りませんか。「未来」を作る言葉を。私たちは「未来」を作ることができます。「言葉」によって。神さまが呼び集めてくださった私たちだからです。

もしもそのことを忘れそうになったら、日曜日の 10 時 30 分から、この場所に来てください。聖学院教会の礼拝をして、神さまからのメッセージを、一緒に聞いて行きましょう。

2023 年 10 月 31 日 聖学院大学 全学シリーズ礼拝「聖学院 120 周年を覚えて」